

金剛お姉さまは砕けません！

珠洲鈴涼理

「英国で生まれた帰国子女の金剛です。よろしくお願ひします」

口に含まけていたコーヒーが三式弾ばりに宙を舞う。

「瑞鳳です。軽空母ですが、練度が上がれば、正規空母並みの活躍をお見せできます」

「それは楽しみです。期待できる新人です」

ふふ、と笑う彼女。天龍型の一番艦の威圧的なそれと違い、気品に満ちた微笑みだった。

誰だこいつ、と提督は小さく呟いた。

それは緊張気味な軽空母・瑞鳳に向けられた困惑ではない。瑞鳳は新たに鎮守府入りした艦娘で、執務室に連れてきたのは提督本人なのだから。

「提督、ではいつも通り瑞鳳さんを皆さんに紹介してきますね」

右も左もわからない瑞鳳は「金剛さん？ あいつ、提督、また後で——」お姉さん気取りの彼女に手を引かれて執務室からいなくなってしまった。

一種の妙な慌ただしさに包まれていた執務室が静かになる。提督は上質な専用椅子に着席すると、飲みかけのコーヒーを一口。

「誰だあいつ……誰だ!!」

ツッコミをしても一人。

「帰国子女の金剛です。——つてえエ？ 金剛デース！ じゃなくて!? いつもの英国かぶれは!? 金剛が新人って単語使ったの初めて聞いたよ！ 建造の時 New Face つていつも言ってるよね！」

提督は焦った。沖ノ島海域あ号艦隊決戦作戦時にて比叡が沈みかけた時と同じぐらい焦った。敵艦を見誤った雪風の酸素魚雷で誤爆しかけ、思わず失禁しそうになったことを思い出す。

「金剛がおかしい、何故だ……何故敬語なんだ？」

いつもの陽気かつ独特なトークで新人艦娘を牽引するのが金剛の役回りだったはずだ。だから、だからこそ提督は新たな艦娘を迎え入れる度に金剛を呼び出していた。

金剛の身に何かあったのか。紅茶と間違えてコーヒーでも口にしてしまったか？ それとも俺に落ち度でも？

俺が悪いはずがない。提督は自分に言い聞かせた。俺はいつも通りに金剛を呼び出しただけだし、来るまで瑞鳳を話したり艦載機のことについて訊いたり、どんな艦載機を積んでいるのか触っていただけなのだ。

本当にそれだけなのだ。執務室に来て早々、瑞鳳に自己紹介をかましてあの口調だ。予想だにできないし、していないかった。

「だがあの金剛。鎮守府に来て間もない頃そっくりだ」  
ずず……。

コーヒーはもう冷めていた。埃のコーニーが浮かんだ海を飲み干した。

\* お姉さま \*

鎮守府戦艦寮に軽快な鼻歌が響きます。

今日は姉妹共々久しぶりのお休みをいただきました。

これでゆっくりとお姉さまとお茶ができると思うと、今からうきうきします。

「ああお姉さま、お姉さま……」

「比叡？」

なんと前からお姉さまが！ 私に会いに来たんです

ね！ 比叡、感激です！ おっと、榛名の口癖が。

「お姉さま！ おはようございます」

「ごきげんよう、比叡。今日もいい天気ですね」

「そうですね！ 今日はお庭でお茶ができますね——!？」

「？ どうかしましたか、比叡」

あまりにもナチュラル過ぎて流しかけたんですけど、お姉さまの口調おかしくなかったですか？

「比叡にも紹介しますね。新たな軽空母の瑞鳳さんです」

「あっあの、軽空母の瑞鳳です。よろしくお願いします」

ぺこっとおじぎをする瑞鳳ちゃんに合わせて一礼。

「金剛お姉さまの妹分、比叡です」

「私のかわいい妹です」

「比叡さんですね、拙い軽空母ですが……」

「あつ、あの、お姉さま？」

スルーされた瑞鳳さんがしょぼんとしていますがそれどころではありません！ いかにも優雅なお姉さまにな

って——ああつそんなお姉さまもいいんですけど！

「どうかしましたか、比叡？」

「そ、その口調は一体——」

「何か変ですか？」

「いやっ、あのっ、そんなお姉さまも素敵なんですけど、」

「お茶の時間、楽しみにしてますわね」

私にはそれ以上お姉さまを問い詰めることはできませんでした。私が呆然と立ち尽くしている内に新人軽母を連れてお姉さまは戦艦寮に入って行ってしまいました。

「ティータイムが楽しみですネ——」

って言いますよねお姉さま!？」

お姉さまなのであんなお嬢様みたいな口調にいやそれもそれでお姉さまの気品がよりあふれるようになって魅力的なんですけどもさっすがなんですけどええと、

「あんなのお姉さまじゃない——!!」

鎮守府サスペンス劇場　ネオサイタマの呼び声

鈴木真吾

西暦XXXXX年、謎に満ちた実際邪悪な勢力である深海棲艦と連合軍の戦いは熾烈を極めていた。そしてある日、新たな提督が新艦隊の指揮を執るために横須賀鎮守府へ着任するある日の出来事である。提督の使命は艦隊の指揮と、敵勢力のサーチ・アンド・デストロイ、奥ゆかしく言えば深海棲艦のスレイである……いいね。

場所は横須賀鎮守府。時刻は金曜日のヒトフタマルマル。お昼はカレーである。金曜日なので夜もカレーである。鎮守府の各所から昼の準備で慌ただしくしている頃、新たに着任する提督を出迎えるべく、担当秘書を務める艦娘が鎮守府の最寄り駅で電車を待っていた。

キョートリパブリックからネオサイタマ行きの新幹線に乗り、さらにそこから海岸線に向かって伸びる超特急列車「ダアシエリス」に揺られること九〇分ほど……鎮守府の最寄り駅を降りると、青い服に金髪の艦娘が「歓迎」提督「ようこそ横須賀鎮守府へ」というノボリを掲げて提督の到着を待っている。バストは豊満である。そしてもうひとり、彼女の隣で奥ゆかしくあたりを見回す艦娘がひとり。そのバストは平坦であった。

「いいかしら？　提督がお見えになったら、練習の通

りにね。恥ずかしがらないでね♪」と50口径三年式20・3連装砲めいた豊満なバストの艦娘が、40口径8式12・7cm連装砲めいた平坦なバストの艦娘に目を配る。なんとカワイイヤッターな光景であろうか。

「はい、頑張ります……でも、本当に、わ、私なんかで良いんでしょうか？」

「いーのいーの。何よりも経験が大事だからね。お姉さんに任せなさい！　練習通りにやればバッチリだから。ほら、こうやってノボリを高く掲げて、ヒラヒラさせて。提督が見えたら『ばんばかばーん！　ようこそ鎮守府へ！』ってね。簡単でしょ♪」

「え、ええ。でも、私、ほんとうに上手くできるか……」

「じゃあ、練習ね。ほら、いくわよ『ばんばかばーん』」

「『ばんばか……ば……』やっぱり恥ずかしくて。すいません、私なんかがお手伝いで来てしまつて」

鎮守府駅は今日もブツダめいた青い空が広がっている。すると遠方からダアシエリスの武装霊柩車めいた駆動音が勇ましく轟く。「あら、そろそろ到着みたいだね。準備いいかな？」と豊満なバストの艦娘が平坦なバストの肩をバシバシと叩く。

「が、頑張ります……でも、ほ、本当に私なんかでよろしかったんでしょうか？」

「慣れよ慣れ。お姉さんたち、特に足柄ちゃんの飢えた

狼ぶりをお手本になさいって。そのうちに『撃て！ 撃てえ！』なんて無意識に叫べるようになるわよ♪」

「はい……頑張ります」

開いたダアシエリスの扉が閉まり、ホームを発車する。鎮守府の最寄り駅に一般客が訪れることは少なく、ただでさえ平日のマッポーめいたヒトフタマルマル時である。ホームに降り立つ乗客はまばらであり、その中に一際目立つ白い制服を着た男がいた。提督Ⅱサンである。

「お、電車が発車したということは、あの人ね。うふっ、

羽黒ちゃん、いっくわよ。ばんばかばくん」

「ば、ばんばかばくん（震え声）」

「提督！ お待ちしておりました。鎮守府へようこそ♪ 秘書を担当させて頂く、重巡洋艦愛宕です。こちらには副秘書という形でアシスタントを担当する……」

「みよ、妙高型の……重巡羽黒です。あの……よろしくお願ひします」

ノボリを振る二人の艦娘の前に近づいた白装束の男は帽子を奥ゆかしく取ると、「ドーモ。愛宕Ⅱサン。羽黒Ⅱサン。提督です」と礼儀正しいアイサツを返した。某月某日、新しく着任された提督の秘書を担当する私は、アシスタントの羽黒ちゃんを連れて提督をお出迎えした。礼儀正しい、というより一風変わった挨拶

を返されて少し戸惑ってしまったけれど、きっと新しい着任地で緊張しているのよね。最初はそう思ったけれど、提督は少しどころかものすごく変わった方で。

これはある日のこと、司令官室の模様替えを手伝っていると、ナチュラルな床はい草のタタミに、暖炉は囲炉裏に、執務机は戦略チャブ・ゴタツになって、ハンガーラックにはセーラー服ではなく赤い装束が大量にかかれ、「なのです」と書かれたされた掛け軸はいつの間にか「棲艦殺すべし」という掛け軸に変わっていた。

ヲ級ちゃんがんばります

神秋昌史

我が名はヲ級。空母ヲ級。

とつてもつよい。エツヘンするほどつよい。深海棲艦の大ベテラン。

趣味は大海原の水面を漂う、人間の落とし物を拾い集めること。いろんな物が流れてきて困る。海をきれいに保つためとはいえ、気に入った物を選びすぐって溜める我が宝箱も、もうすぐ満杯だ。また新しい箱をル級ちゃんにもらわないといけない。嗚呼この日々、輝かしくも多忙なるこの日々。

ところで今日は、また負けた。人間の艦隊に負けてしまった。

「ヲ……」

我々の棲処は広くて賑やか。あちこちで駆逐艦たちがわきやわきやしている。ただの海底と侮るなかれ、人間が廃棄した椅子やら何やらによる棲処のドレスアップはヲ級の仕事。ドアがわりに岩間にぶっ刺した窓とかお気に入り。とつてもお気に入り。

中でも重要品、すこぶる座り心地のよいソファに腰掛けて、通りがかった重巡洋艦のヲ級ちゃんに手を振る。

「ヲ、ヲ」

「マタ……負ケタ。クヤシイ……」

ヲ級ちゃんはとつてもマジメ。いっしょけんめい人間と戦って、ヲ級や駆逐艦ともよく遊んでくれる。どつちかというところ、ヲ級は後者を高く評価してるけれども。

にしても、おかしい。ヲ級ちゃんもとつても強い。ル級ちゃんやヲ級ちゃんは語るにしかず。ましてや棲鬼さま方の恐ろしさときたら、もはや言葉にならない。ヲ級だつていつもビビってる。

なのにどうして、あんなマヌケ面ばかりの人間艦隊に勝てないのだろう……？

ひらめいた。

「ヲっ」

ヲ級ちゃんの副砲を引っぱって訴える。いちばん愛用しているステッキで、海底の砂に絵を描きながら。

我々の艦隊は、陣形を組んで戦う。

我がヲ級の得意とする輪形陣や、ル級ちゃんの単縦陣など。これは人間もいっしょ——というより、我々が人間の陣形を見て、マネしているだけなのだ。理由はなんか、こう、つよそうっていうか。実際やってみるとつよい気がした。弾が間違つて味方に当たったりしないし。

だけど、やっぱりぎこちない。輪形とかじょうずな丸にならないし。みんなそれぞれ速度が違う上に足並みがそろわなくて、単縦陣なんかきれいな一列になった試

しがない。なんとなく、それが悪い気がする。

いいや。むしろ、それにこだわって戦っていることが、勝率を下げているのではないか？

「一理アル」

リ級ちゃんの同意を得、我々は独自の陣形を編み出し、人間に対抗することになった。

参考例はもちろん、我がヲ級の宝箱（エリート級）よりごちゃごちゃと召喚せし、秘蔵のテキスト集――

\*\*\*\*\*

敵艦隊見ユの一報に、我が機動部隊は動き出す。

今日こそ退かぬ。媚びぬし省みぬ。人間艦隊め、覚悟せよ。今までの勝利をせめてもの誉れとし、泣きながらドックへ逃げ帰るがよい。撃沈はしない。というかできない、見たとこ敵は誰も小破すらしてないし。おのれ。

「ヲっ」

リ級ちゃんに手を振って合図すると、形から入るのが大好きな彼女が、むやみにつかい声で号令した。

「艦隊、展開！ 弱キヲタスケ、強キヲクジクっ……参上、リ級レッド！」

「ヲ！」

「ヲ級ブルー！」

「ヲ！」

「ヌ級ブラック！ ニ級ピンク！ 並ビニ同ジクニ級イエロー！ 我ラッ――」

うまくしゃべれない駆逐艦たちをフォローし、胸を張つたり級ちゃんが堂々と敵艦隊を指さす。

「我ラ、深海戦隊！ 棲艦ジャーツ！」

「ヲー！」

リ級ちゃんを中心に、五隻がシンメトリーに展開。今までにない陣形をきめる。一隻あぶれた駆逐へ級ちゃんがわたわたしてるけど、うん、しようがない。

これぞベテランのヲ級考案、その名も高き【戦隊】陣。かなうまい。畏怖せよひれ伏せよ。単縦陣から流れるようにV字へ移行するこの手際。ル級ちゃんに爆笑されながら何度も何度も練習した甲斐があった。

今日こそ勝利をつかみとる。ところでひとつ疑問。「ヲっ？」

レッドはヲ級じゃないの――

『バァァーニングラァァァー……ブッ!!』

通用しなかった。

パシフィック艦これスレイヤー

茶渡詠爾

提督ならば一度は疑問に思ったことがあるだろう――

空母はなぜ攻撃が遅いのか？

至極簡潔に答えよう。

『弓』だから

である。

提督にキュー・ジツの心得があってもなくても、艦載機をシュートするには時間がかかる。先刻承知である。

少なくとも開幕ボミングからファースト・アタックまで、航空母艦すなわち空母が昼間のアルマジロのごとく何もできないのは自明のコトワリ。

その空白を埋めるのが空母以外のアナザ艦種である。

極大火力の戦艦、使い道のない重巡、遠征ゴヨータシの軽巡、プリティ・ソー・キュートな駆逐艦。

潜水艦？ なにそれウマインデスカー？

話を戻すと、空母には護衛艦が必要なのである。

であるが！

コトここに至って、残虐なイクサの場と化したバトルフィールドⅡ北方海域最終ステージに集結した艦隊の面々はなんとということでしょう。

「一航戦、赤城、出ます！」

「五航戦の子なんかと一緒にしないで」

「わが機動艦隊、出撃します！」

「徹底的に叩きます。索敵も念入りにね」

「いい、瑞鶴？ 行くわよ。機動部隊、出撃！」

「空母瑞鶴、抜錨します！」

全艦、空母。

提督の空母ジャツジメントここに極まれり。

謎のカンムス・パワでヒトの形をした空母カノジョたちは、やはり謎のカンムス・パワの力で海面に浮かび立つ。

腕を組んでニオー・ダチする赤城Ⅱサンを旗艦に、サイドテールのプリティな加賀Ⅱサン。揺れてハミ出る蒼龍Ⅱサン。ラヴ多聞丸の飛龍Ⅱサン。薄幸の美少女・翔鶴Ⅱタン。ツインテールツンデレの瑞鶴Ⅱサン。がタンヨコジンで並び立つ。

壮観！ 壮麗！ 弓道袴！

居並ぶヨコスカⅡ鎮守府の精鋭空母、六人の前に敵はない。

北方海域の霧の向こうから、しめやかに敵が姿を現した。

ヨコスカⅡ鎮守府の空母カノジョたちを待ち構えていたボス艦隊は、

空母ヲ級 フラグシップ 数1！

空母ヲ級 エリート 数5！

敵Ⅱサンも全空母編成だったのである！ まことにキセキか！

「第一次攻撃隊、発艦して下さい！」

赤城Ⅱサン的一声で空母カノジョたちは艦載機アロウを放つ。

偵察機サイウンの通信により、会敵するであろう敵群に向け、六人が右から順に弓を起こし、艦載機をショットする。ジツに美しいジャパニーズ幽玄である。

ワキメもふらず飛んで行く艦載機アロウ。目標地点に到達した艦載機はボミングおよびサンダ・ストライクを行い敵を殲滅する――

ように思われた！  
まさにそのときだった！

バトルフィールドⅡ北方海域最終ステージの仄暗い濃霧――ボミングで発生したスモークを払うように、オレンジとイエローとミドリりの怪光が大挙して押し寄せくるではないか。

敵の艦載機だ！

その無感情かつ一糸乱れぬ開幕ボミングに、我らが空母カノジョたちは一瞬にして水柱スモークの彼方に隠される。

相手のスモークが晴れる。

しかし我らが空母カノジョたちのボミングにより、敵空母は少なくとも全艦轟沈したはず……

否！

空母ヲ級 フラグシップ 無傷！

他方、空母ヲ級エリート 小破、小破、小破、中破、大破。

こちらのスモークが晴れる。

消え去った濃霧から現れたのは、ホワイトを中心とした赤、青、ミドリ、イエロー、迷彩、イロトリドリの空母装束！

そう、空母である！

当然のごとく、全員無傷！！

残念なコトに、蒼龍Ⅱサンは大破した。

が、それでも我らがヨコスカⅡ鎮守府の空母カノジョたちは、リンジンケーで並ぶ敵空母の前にキリツと整列する。

「ドーモ はじめまして。赤城型1番艦・赤城です」

先手をうち先制オジギしたのはリーダー赤城Ⅱサンだ。「一航戦以下を代表して、私がアイサツに変えさせていただきます」

無表情だったヲ級フラグシップが血相をチェンジした。「な……に？ 赤城だと!? 貴様がそうだというのか！」



会いに来るアイドル

高遠夕

これは、ゼロに至るまでの話。

まだ彼女が燃2弾4鋼11と呼ばれる前……。

朗らかな陽光の下、穏やかな海の上。水面に佇む一人の艦娘がいた。軽巡洋艦川内型第三艦・那珂である。

「はあ……」

その口からため息が漏れた。それももう何度目になるかわからない。ぼんやりと水平線を見つめたまま、右に左にノロノロと漂っている。出港してからずっとこの調子だった。

戦闘海域であれば命に関わる気の抜けっぷり。だが、幸か不幸かその心配は無い。それこそがまさしく、上の空の原因なのもあるのだが……。

「はあ……水平線異常なくし……」

今現在、那珂が従事している任務は……警備任務だった。現状を一言で表すなら、暇。もちろん任務であることには変わりないのだから、そんなことは口に出すべきではない。口に出すべきではないのだが……退屈なものは退屈なのである。

「だいたい敵影なんか見えるわけじゃないじゃん……すぐそ

こで戦ってる第一艦隊が全部やつつけちゃうんだし」

思わず愚痴っぽくなってしまった。しかし、事実である。警備とはほとんど名目で、実際は『水平線を眺めるだけの簡単なお仕事』と化してしまっている。

左右に目を凝らして見れば、なるほど同じ第二艦隊の艦娘たちも虚空を見つめている。その眼差したるや、死んだ魚の如し。一応それなりの陣形は組んでいるが、今はそれが逆に不気味だ。等間隔に並べられた鎮魂石碑のように見えなくもない。

「みんな、なに考えてるんだろ……あつ、なにも考えてないとか!? 心を無にするのよ、那珂ちゃん……! 心頭滅却すれば爆撃もまた涼し……なんつって! なんつって! こんなところじゃ爆撃されないけど! アハハ、ハ……うおおあああああッ!!」

想像以上の虚無艦……もとい虚無感が襲いかかる。那珂は海上でザバザバと駆け回っ——溺れかけた。

「……ぶえ、危うく虚しさで轟沈するところだったよ……」

というかすでにちよつとドック入りしたいレベルで傷ついている。できれば高速改修して欲しい。主に心を。傷心の原因は、わかっている。

遠くで砲撃の音が聞こえた。海面に反響し、ぐわんぐわんと残響が。一陣の風が足下にさざ波を立てる。髪先

を滑った水滴が、波に吞まれて消えた。

時間は少し遡る。

ひと任務終えて、那珂たち第一艦隊が帰投した時のことである。

「あく、もうくたくた！ 提督うゝ、夜戦はお肌に悪いんだよ？ アイドルはお肌が命！ はやく入渠く……およ？」

鎮守府に着くなりドックへと直行しようとしていた那珂は、建造場に見覚えのある姿を見つけた。さっきここに来たばかりだという風に興味深げに辺りを見回している艦娘——軽巡洋艦川内型第一艦・川内だった。

那珂は思わず歓声を上げた。

「おねーちゃん！」

「うわ!? 那珂だ！」

「がーん！ うわっ、て……ひどっ！」

「あはは、冗談よ。あんたもこの提督のもとに就いてたのね……相変わらずあっぱっぱいな感じで安心したわ」

「おねーちゃん、さつきから私のこと褒めてるの？ バカにしてるの？」

「褒めながらバカにしてる」

「……ここが海だったら酸素魚雷を誤射してるところだったよ……」

「お？ 言ってくれるようになったじゃない」

人懐っこそうな笑みを浮かべる川内。那珂のお団子へアをぐしぐしと無遠慮に撫でてくる。

「おうああ」

けれども、那珂はその横暴にされるがままでいた。

懐かしかった。その昔、まだここに就く以前。演習で成果を上げた折には、よくこうして撫でられたのを覚えている。そのたびに気恥ずかしい思いをして、なんだかくすぐったくて……でも、やっぱ嬉しかった。

懐古の念を覚えたのは川内も同じようで、悪戯な笑みはいつの間にか優しい姉のそれに変わっていた。

『潮、被弾！』

船体に大きな衝撃を感じたその直後、わたしの周囲に何本もの水柱が立ち上るのが見えました。海面が波打ち、わたしの体を揺さぶります。転覆しないように必死にバランスを取っていると、通信士さんが声を張り上げるのが聞こえて、そのときはじめて自分が砲撃を受けたことに気付きました。

『被害状況は』

『多少の損傷あり、中破と判断』

背中の煙突が半分ほど吹き飛んでいました。

『潮は下がって。他の艦は援護を！』

「はっ、はい！」

わたしは戦列から離れようとはしますが、思うように体が動きません。それもそのはず、わたしは主機の一部を損壊していて、十分な速度が出せなくなっていたのです。のろのろと戦列を反れるわたしを見逃す敵艦隊では、けっしてないはずでした。

砲撃が止んで、次にやってくるのは敵航空戦力による爆撃です。

対空機銃を構えて艦爆隊の攻撃に備えるわたしに、け

れどもやってきたのは爆撃ではありませんでした。

『翔鶴艦爆隊より、敵航空母艦を撃破したとの報告！』

『敵艦隊、退いていきます！ 追いますか？ 今なら夜

戦で仕留められることと存じます』

『いや、いい。またいつでも来られるさ』

『了解しました』

『全艦、転進！ わが艦隊は本海域より離脱する！！』

わたしは、生き延びることができたのです。

作戦の失敗と引き換えに。

\*\*\*

艦装を外すと、わたしはお風呂に入ります。曇りガラスの向こうで、わたしの壊れた艦装を修理するべく、整備の皆さんが忙しそうに駆け回っています。

その間わたしは湯槽に身を沈めて休息を取るのでした。ゆっくりと息を吐き出してみても、それで鉛が溜まったような胸が軽くなったりはしません。

「はあ……またわたしが中破したせいで途中で撤退することになっちゃいました」

どうしてわたしはすぐに壊れてしまうんでしょうか。もちろん、わたしは駆逐艦だから、装甲はけっして丈夫ではありません。でも、他の駆逐艦の皆さんは、ちゃん

と艦隊の中で役目を果たしているような気がします。

島風ちゃんは、敵の意識を充分引きつけながら、降り注ぐ砲撃をたくみにかわします。砲撃をかいくぐれば、彼我の距離が迫つての雷撃戦。わたしたち駆逐艦の時間です。連合艦隊一の俊足艦と称されていますが、それがけっしてカタログスペックだけによるものではないことを、わたしたちはよく知っています。島風ちゃんは、駆逐艦らしく、駆逐艦として信頼できるはたらきを見せているのです。

駆逐艦らしからぬはたらきといえば、夕立ちちゃんや綾波ちゃんがいます。

夜戦で雷撃をいくつも敵巡洋艦に命中させて大戦果をあげた夕立ちちゃんもすごいです。そこまですはなくても、綾波ちゃんもすごいとわたしは思っています。

綾波ちゃんは、わたしと同じ特Ⅱ型駆逐艦です。わたしと同型艦けれども、先の作戦では駆逐艦を一隻撃沈、二隻大破の大活躍。もちろん綾波ちゃんも相手の砲撃にさらされたのだからぜんぜん無事ではなくって、大破して自力で航行不能になって、他の艦に曳航されながらの帰還でしたけど、作戦目標は果たされていましたし、綾波ちゃんも、誇らしげな顔をしていたのを覚えています。わたしも、ここに帰ってくるときに、あんなふうな表情でいたい。

けれど。

「どうやったら艦隊のお役に立てるんでしょうか」

ううん、違う。

「……どうやったら、艦隊の皆さんに迷惑をかけないで済むんでしょうか……」

わたしは、きつと足手まといになっています。

顔を半分湯槽に沈めてぶくぶくと息を吐き出してみただれども、どうすればいいのか、やっぱりわかりません。わたしと他の駆逐艦の皆と、何が違っているんでしょうか……？　ぎゅっと膝を抱えようとしたら、胸元がやわらかく押しつぶされて、そのとき気付きました。

もしかして……？

ううん、どうだろう。でも、そうだ。あとで漣ちゃんに聞いてみよう。

艦娘ふえありーず

影浦桐夜

「お、おお……」

ベッドの上で、週刊誌5冊を積んだくらいの大サイズの郵便物を前に、少年が感嘆の声を上げた。

彼の名前は【祐天寺颯真（ゆうてんじそうま）】。

ゲームが好きに至って普通の高校生。

——さて。届いてから10分は経っただろうか。

彼は慣れぬ正座のせいで足が痺れているというのに、それに気づかないほど目の前の箱を注視していた。

「……よし」

おもむろに立ち上がった颯真は——

「んぎよあっ！」

痺れていた足が布団にとられ、盛大に転んで床に落下した。

「~~~~~!!」

痛みに悶えること数分。やっと痺れも傷みも収まったのか、颯真は再び立ち上がる。

さっきの事は忘れたかのような笑みを浮かべ、彼はスリープ状態だったPCを復帰させて、机の引き出しからカッターナイフを取り出したのだった。

「へえ、意外とちっさいんだなあ」

郵便物の中から出てきたのは、白銀の外装と深い青色の開閉部が付いた機械のカプセル。それが二つ。

外装であろうそのカプセルには、『艦娘（かんむす）】ふえありーず』と可愛らしい文字で記載されていた。

颯真は段ボールの底に入っていた説明書を斜め読み。

「へえ、このままUSBを差して同期させればいいのか」椅子に座り、PCに向かう。

最前面に映っているのは、『艦隊これくしょん』。通称『艦これ』。颯真が幼馴染に誘われて始めた、軍艦を可愛い女の子に擬人化させたソーシャルゲーム。

今回届いたのは、そのゲーム内でのイベントクリアの報酬の一つで、初の抽選式だったもの。

全提督が夢見たであろう商品が、抽選で先行配布されることになっていたのだ。

その夢とは、艦娘を現実に呼び出すこと。

今までにない試みであり、商品であり、艦これに限らず全ての創作物に対して一度は誰もが夢見ることに。それを、この運営は実現させてしまったのだ！

しかしまだ大量生産できる代物ではないらしく、テストも兼ねてユーザーに抽選式報酬として配布することに。

結果、80人の枠に、約90万人の提督が殺到した。

その倍率はなんと、11250倍ほど。

その敵しすぎる倍率の中、今までにない強運——いや、豪運を発揮して、颯真はこの艦娘ふえありーずを手に入れたのだった。

そんな全ての運を使い果たしていきそうな彼は——

「さあ、誰にしようか……」

PCの前で腕を組み、まさかの熟考中。

どうやら、まだ時間はかかりそうだった——

悩むこと1時間。

「やっぱり、この2人だ！」

悩みに悩んだ挙句、2人の艦娘を選択。

小さなウインドウが表示され、同期と書かれたボタンをクリックする。

「う。10分待ちかあ。コーヒー入れてこようかね」

と言うわけで、までも休憩タイムです。

10分後。

ドリップしたコーヒーをカップに入れ、部屋に戻った

颯真。

【飄々（ひょうひょう）】と現れた颯真を出迎える、少女の声。

「初めまして、提督。扶桑型超弩級戦艦、姉の扶桑です。どうぞよろしくお願いたします」

「うわっ！ びっくりした！」

危うくコーヒーをぶちまけそうになる颯真。

机の上に視線を向けると、そこにはにこやかな笑顔を

向けてくる、よく見慣れた艦娘が……

「……マジかよ。わかっちゃいたけど、マジかよ」

30センチくらいの大サイズの扶桑を見て、颯真は哑然とする。

と、そこで気づいた。扶桑の背中から、ちらちらとこちらを見てくるもう1人の少女の姿に。

「山城、ちゃんと挨拶なさい」

「は、はい、姉さま」

おどおどしながら出てきたのは、扶桑とよく似た姿をした——

「い、妹の山城です……その、よろしくお願します」

「あ、ああ、うん。よろしく、二人とも」

理解していても、やはり今までに知らないことが起きているせいか、颯真も現状に追いつけていない。

しかし、扶桑は違うようで……

出ないこと、島風の如し、ですっ！

珠洲鈴涼理

ついに我々は海軍上層部が《島風編成任務》を凍結し、島風を狙った建造を禁じたのかを物語る証拠を入手した。舞鶴の、今は廃墟と化した鎮守府跡にて拾ったものだ。

——とある提督の航海日誌より。

May 27, 2013

夜、軽巡の夕張と阿武隈、空母の龍驤と麻雀をやった。龍驤のヤツ、やたらとついていやがったがきつとイカサマに違いねえ。提督をカモにしやがって。

「檣載機のみんなー、お仕事お仕事オ！ 檣！」

龍驤が手牌から四枚の牌を前に倒す——字牌の中。カシャン、と卓の隅に赤い檣載機が一機、急発進。

王牌から嶺上牌をツモる龍驤。捨て牌は典型的な染め手。ならば狙い目らしい萬子を絞ればいいだけのこと。

夕張は挑戦的な笑みを浮かべて萬子を、阿武隈は混色の気配に怯えつつも素子を切る。

「降りようたってそうはいかんで。空母機動艦隊、出撃するで〜！ 檣っ！」

はあ？ また檣だと!?

発進した二機目はまな板——ではなく、白。

「いつてみよう！ ツモ！」

ばたばたと倒されていく龍驤の手牌。

「ツモ・混一色・小三元・白・中の嶺上開花や！ やったー！ やったでえ！ ウチ大活躍や!!」

あのツモによって龍驤はトツプへ、そして俺はラスに転落してしまったのだが。

何が言いたいかと言えば、最近運が悪いということだ。

May 28, 2013

今日、海軍のお偉方かた新しい艦娘の編成任務を頼まれた。服をひんむいたアザラシのようなヤツらしい。

なんでも北方海域のとある撤退作戦にて必要とされているらしい。駆逐艦のみの編成でなければとても成功できないように、駆逐艦の中でも最強と謳われる島風型1番艦・島風が欲しいのだそうだ。

May 29, 2013

我々の任務は島風の魂の鹵獲もしくは島風の建造。

どうやら南西諸島海域にて島風に似た姿が目撃されているらしい。深海棲艦に取り込まれているのだろう。メ

イン艦隊を率いるほどでもないと思い、地道に練度を上げていた重巡や軽巡で練り出すことにした。数回に渡る出撃の結果、島風は見つからなかった。

May 29, 2013

南西諸島海域を闇雲に出撃しても意味がないようだ。かつて大激戦を繰り広げた沖ノ島海域でしか目撃情報がないとのことで、バシー島沖を行き来しても意味はなかった。

一度制圧したとはいえ、やはり出撃するには対応の準備がある海域だ。現在西方海域攻略の柱を担う空母・赤城を旗艦に据えて編成を組んだ。

かつての勢いは衰えるとはいえ、何度最奥の指揮艦隊を潰しても沸いて出てくる深海棲艦どもには辟易する。一度ボス格を沈めてしまえば鎮守府海域への侵攻や海域の支配をピタリとやめるものの、ループでも組まれているみたいに現れて待ち構えているのには怖気が走る。

May 30, 2013

経路上、海域に深く入れば入るほど鹵獲されている艦娘が見つかりやすい……とは思う。

我々は深海棲艦に対抗する手段として、唯一艦船を動かすことができる艦娘を迎え入れて戦っている。艦船の魂を宿した艦娘を乗せることではじめて艦船を進水させることができるのだ。

島風を見つけないければ快速の駆逐艦が建造できても動かすことは叶わない。

June 01, 2013

敵空母機動艦隊を沈めた際に最上を発見する。

艦隊のダメージも気になったので撤退し、早速重巡最上を進水させた。

練度を上げることで艦載機を積めるようになるという。興味深い艦娘だが現状は島風の入手が優先だ。練度向上任務は後回しだ。

June 03, 2013

出ない。噂に聞く強さに違わぬ見つけ辛さだ。

おまけに編成に加えていた赤城が大破した。貯蓄のポークサイトがごっそり減った。



青葉、見ちゃいました！

嗚呼本あうあ

「パレードをやる。野球の優勝チームがやるような、派手なやつ」

そんな司令官の一言から、沖ノ島海域攻略記念の凱旋パレードを執り行うことが決まりました。

今や司令官は海路という我が国の生命線を、二ツも同時に蘇らせた大英雄。そして青葉たちは立派な武功艦となったわけで、自分で言うのもナンですが、パレードの主役を務めるには十分な資質があるといつて過言ではないはず。

むしろこれは来るべくして来たイベントと言うべきでしょう

）

「とうわけなんですよみなさん！」

と、極秘独占入手情報資料を片手に第一艦隊がタムロする執務室のドアをぶち破ると、そこには荒潮さんがひもとだけ。

「なあに？ パレード？」

床も壁もコンクリ造りの無駄に硬派で冷質な……はっ

きりいって牢獄のようで窮屈ささえ感じる執務室で、しかし、快適そうにくつろいでいました。間宮さんのアイスを片手に。

朝潮型駆逐艦四番艦、荒潮さん。駆逐艦と侮るなかれ。昼夜艦種問わず敵艦を屠ってきた我が第一艦隊の最古参。夜戦での破壊力は戦艦である霧島さんや榛名さんの追隨すら許さず、沖ノ島海域の攻略においても彼女は「避ける盾」として、結果的には抜群の耐久力を誇り、我が隊を守ってくれました。

そんなクールでどこか大人びた彼女に、にぎやかなパレードのニュースを伝えても、正直、失礼ながら、冷ややかなリアクションしか期待できそうにありません。青葉は、そんな風に思っていました。

「悪くないわ」

しかし、荒潮さんの目には、光、光。今までにないくらい黒目にはハイライトが輝いています。

「……？ ああ？ キヤラ違わないですか？」

「なあに？ 私が子供らしくしていたらいけないのかしら？」

荒潮さんはぷくつとむくれて、上目遣いに私をにらんで来ます。

「そ、そんなことはないですよ！ ただちょっと意外だったんですけど！」

青葉いじめると泣いちゃいますよ？ スペックは雷巡の大○北○さんコンビはおるか某ク○さんだとか長○さんだとか五○鈴さんなど上位軽巡以下なんですから……。「まあいいわ。パレードってことは、パレードカーもあるのよね？」

「あるらしいですよ。それも我々艦娘ひとり一台、艦装（めっちゃ重い）をつけて乗れる我が国の技術の粋を集めて作ったハイパースペックのマシンらしいです」

「素晴らしいわね」

荒潮さんの瞳の中できらきらと星が輝きます。

「おまけに司令官と乗る車はよりゴージャスな装飾がつくそうです」

「いいじゃない。で、その車には誰が乗るのかしら」

「司令官のことだから、我々に話し合って決めさせるんだと思いますよ。おそらく投票になるでしょうね」

そうなれば身内の争いを好まない蒼龍さんと祭りの準備にすつ飛んでいく隼鷹さんは無効票を、霧島さんと榛名さんは互いに一票を投じるでしょう。

「というわけで青葉さん。あなたが私に一票入れてくれれば、私が自分自身に投票するぶんも含めて二票入るわ。そうすれば日頃荒潮沈めだの荒潮潰すだのほざいた挙げ句中破進撃を敢行する提督に目にモノ見せてやれるわあ……」

苦勞してるんだなあ、と同情はしますが、荒潮さんの背後から夕立さんの改二みたいな深海棲艦めいたオーラ出てるのですが。いったい指令官になにをするつもりなんでしょうか。

しかし、指令官はともかく、荒潮さんの言い分は認められませんでした。

「あの……でも、青葉もあの出撃のとき旗艦だったんですが……」

正直に認めましょう。今回は貢献度したいはあんまり高くないです。けど青葉だっていっしょうけんめいがんばったんです！

前世のこととはいえ、多くの戦いを生き残ってきたという矜持だってあります！ 簡単に引き下がるわけにはいきません。

「ということとはつまり、あなたも大トリを譲る気はない、ということね？」

うるるにー

雪峰昂

「響お姉ちゃん、遅いのです……」

もう既に日は暮れて、今日もまた「やっせーん！ やっせーん！」という川内さんの声が聞こえてきている。なのに、響が帰ってこない。改造はもう終わっている時間のはずなのに。

「艦装の調整とか、試し撃ちにでも行ってるのかしら」  
今日行われる——もう終わっているはずだから、行われた——改造は、駆逐艦では初めての二度目の改造。それに選ばれたのが響、私たち暁型の中からだなんて光栄で誇らしい。

そのお祝いのために奮発して、鎮守府内のコンビニで普段より多くのお菓子を用意して待ってるっていうのに雷と電なんてもう、ご飯を前に置かれたのに「待て」をされている犬のような状態よ。つまり、かわいいわ。

「うー、これは辛いものがあるわね」

「ダメよ食べちゃ。響が戻ってきてから、ね」

こうしてなだめるのも何度目だろう。え、私？ 暁は大丈夫よ、一人前のレディーはお菓子を前に涎なんて垂らさないわ。

「暁お姉ちゃんも、さつきから喉が鳴っているのです」

「ち、違うわよ!? 響が遅いからって先に食べちゃおうとか思っていないわよ!」

……一人前のレディーは涎なんて垂らさないわ! 垂らしてないからね!」

ソ連での経験は悪いものではない。

自国のためではなかったとしても戦いの中に身をおき、それなりの功績も上げていた。アメリカに渡った長門たちの扱いに比べれば、余程いい待遇を受けたといえる。だからこそ、気になっていた。暁型の姉妹たちは、一人だけ生き残った私のことを恨んでいないだろうか。生き恥を晒し、引き渡された国に力を貸していた自分のことを。

戦場にいた頃は考えることはなかった。いや、そもそも当時は艦船だったので、考えることもなかったか。

艦娘として再会したときには、嬉しさのあまり少し涙ぐんでしまった。でも先ほどの疑問が頭を掠めて、素直にそれを出せなかった。抱きついてきた暁を、雷を、電を、抱きしめ返すことができなかった。

しばらく共に過ごすうちに、そんな疑問は吹き飛んでいた。まだまだ目の離せない妹たちの、姉らしく振舞おうと頑張っている姉のお陰で、そんなこと忘れていたと

いうのに。

今回の改造について司令官から話を聞いてから、再び湧いたあの疑問が頭を占めている。

今までと違って、彼女たちの知らない艦名なまえになる。それが姉妹との距離を感じさせるようで、自分だけ生き残ったということを知らしめるようで……結局、当日になつて出た言葉は。

「司令官……部屋を変えてもらって、いいかな」

ベッセルマイの姿を見られたくなくて、姉妹たちの拒絶が怖くて。これまで四人でいた部屋から、一人離して欲しいということだった。

艦そろじー

本文：珠洲鈴涼理 鈴木真吾 神秋昌史 茶渡詠爾 高遠夕

影浦桐夜 蒼井拓 嗚呼本あうあ 雪峰昂

イラスト：KOTATU 7281 めー。 とーか

霧ゝ そーさき 島中ありひと 鋳庵

文芸サークル「流星ハートビート」 & C-ROCK WORK

2013年11月4日 第1刷発行

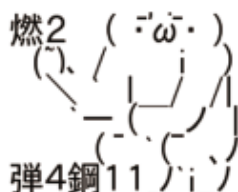
初出イベント 第十七回文学フリマ

★定価は500円くらいですがDMMでの決済はできません！

発行者 珠洲鈴涼理 (流星ハートビート)

編集・本文 DTP 鈴木真吾 (C-ROCK WORK)

印刷所 ちよ古っ都印刷工房



本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、  
法律や発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になるらしいです。  
また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、  
いかなる場合でも一切認められませんのでご注意くださいね。  
造本にはちよ古っ都印刷工房さんに十分注意してもらっておりますが、  
乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。  
まずは購入されたイベント名を明記して発行者にご連絡ください。  
在庫があれば送料は発行者負担でお取り替え致します、多分。  
但し、よくわからんとこで購入したものについてはお取り替え出来ませんよ。  
決まりを破る提督は解体されます。

@SUZURI SUZURIN 2013

Printed in Japan

